

# 黒の 38 手

## あらすじ ( 296 文字 )

主人公の私は娘のリサとチェスをしている。室内のテレビには中年の男が映っている。彼は中学三年生のときの同級生であり、チェスを通じてつながりを持っていた。リサとのチェスが引き金となり、私は彼との記憶を思い起こす。その当時、チェス好きの間で一つの出来事が話題となっていた。それは AI 同士の対局の中で圧倒的有利に戦局を進めていた Nike( ニケ ) という汎用型 AI が明らかに不可解な手を打ったことで不利な状況に陥り、さらにはその直後に電波障害が起こり対局が引き分けになったというものである。単なるバグとは思えないこの一局について世界中で様々な仮説が飛び交うなか、私と彼はこの謎の一手の正体を探り始める。

## 本文 ( 9864 文字 )

(A)

「さすがにその手は失礼じゃない？」

ふいに声をかけられて、私の意識は引き戻された。リサが私を睨んでいる。チェス盤の上にある駒は私の手汗によって怪しげな光沢をまとっている。対局を始めてからそれなりに時間が経っているのだろう。外の暗さと体力の消耗が時間の経過を物語っていた。

「うーん、この手が最適なのよ」

私はリサに正直にそう伝えた。それを受けてリサは再び熟考する。

「そうとは思えないんだけど。ママならもう少し粘れるでしょ。このミスはテレビに集中していたせいよ」

朝から付けっぱなしのテレビには男の顔が大々的に映し出されている。最近のものから若い頃のものまで、男の様々な映像が次から次に流れている。リサはちらりとテレビに目を向けたが興味がないのかすぐに私の方に目を戻した。

「まあ、どちらにしても私の勝ち是不変変わらないわけだけど。降参する？」

「最後までやるのが大事なの。もう少しつきあって」

「いいわ。時間ならいくらでもあるんだし」

その言葉に頬が緩む。リサは盤面に目を落とし、次の一手を慎重に選んでいるようだった。私はこっそりとテレビに目をやる。テレビに映る男は政治家だ。その前は大学教授をやっていた。そして、さらにさかのぼり、彼が中学生だったとき彼の隣の席には私が座っていた。

(B)

「変な盤面だね」

顔をあげると机の横に色白の男子学生が立っていた。目つきが鋭く同年代の学生に比べると大人びてみえる。彼の興味は私にはなく、私が机の上に広げているチェス盤に向けられているようであった。私にはろくに目も向けず、真剣な表情でチェス盤を眺めている。彼は隣の席だったが、話しかけられたのはこれが初めてであった。彼に限らず、新学期早々に教室の後ろで一人黙々とチェスをする私に話しかける人は一人もいなかった。

「チェス好きなの？」

私は彼に尋ねた。

「好きだよ。明確なところがね」

私は相槌を打ち、話の続きを待った。

「ルールの中で全ての駒が各々役割を担っている。その役割は一つの目的のためにある。とても明確だ」

彼が言いたいことはなんとなく分かった。多くの中学生が感じる漠然とした不安は、程度の差はあれ私の中にもあった。相手の考えが透けて見えた気がして、私の中に意地悪な感情が芽生えた。

「現実是这样ではないものね。人には確かに色々な役割が与えられているけど、一つの明確なゴールなんて存在しない。自分が何のために存在しているのかと頭を悩ませる」

彼は私の嫌味を含んだ発言を吟味するように小さく頭を揺らし、それから私の手元に視線を向け口をひらいた。

「種の存続は人間の一つの目的じゃないかな？チェスのように終わりがあるわけではないからゴールとは言えないけれど」

彼の発言に私は幾分か面食らったが、それ以上に先ほど芽生えた感情がさらに肥大化していくのがわかった。

「生殖のために生きていると？ずいぶん古風な考え方ね。今日子供を持たないことは普通の選択よ」

私はそこから一方的にこのテーマに関する持論を述べた。私の口はほとんど機械のように動き続けた。徐々に過熱する私の主張を彼は反論することなく黙って聞いていた。そして、ときおり思いついたように黒の駒をチェス盤に置いては首をかしげていた。

「つまりね、たとえそれが種の存続に反した行為だったとしても個人の意思が制限されるべきではないわ」

吐き出すものがなくなったことで私の口はようやく一時停止した。彼はその停止を十分に確認すると持っていた黒の駒を机に置き、わずかな間を置いてから呟くように話し出した。

「どうやら僕は子供が作れないらしいんだ」

私はその言葉の意味を十分に理解する間もなく彼は話を続けた。

「今までは君のように考えていたし、今でも頭では理解しているつもりなんだけどね。いざ選択肢を失うとそれこそが世界で唯一の目的のように思えてしまうんだ」

彼を傷つけてしまったかもしれないという懸念とこの話題を持ち込んだのは彼本人であるという事実が私の中で互いの優位さを競っていた。はっきりとしていることは先ほどまで持論の核を担っていた金属的な知識の塊が今ではひどくグロテスクなものに見えるということだった。少しのあいだ沈黙が続いた。私は少なくとも謝ることは失礼だという判断にいたり居心地の悪さとともに窓の外を眺め、二週間ほど降り続けている雨に意識を集中させようと試みた。

「それにしてもこれは変な盤面だね」

沈黙を破ったのは彼の方だった。彼は先ほどの会話などなかったかのように私に話しかけてきた。声の調子から気を遣っているわけではないことが伝わり私の緊張は緩んだ。

「そういえばどれくらい前から見てたの？」

「黒の5手前から」

「何か気になるところがあった？」

「黒の2手前だよ。黒は圧倒的に有利だったし難しい局面でもなかった。それなのにあの一手で一気に劣勢になった。君は変わってるね。一人で対局するにしてもこれじゃあ、白が勝つのは時間の問題じゃないか。せつかく面白い局面だったのに」

彼はチェスのことになると非常に饒舌になった。彼が指摘した黒の2手前は b4 にいる黒のクイーンが b8 にいる白のビショップを取ったところだった。ただ、その次の白の手で黒のクイーンは白のポーンによって取られてしまう。それは初心者ですら避けられるような初歩的なミスであった。不思議がる彼に私は種明かしをした。

「実はこれ、私が考えて指しているわけじゃないの。AI 同士が行った対局の再現なのよ」

「なるほど。けど、だとしたらさらに謎が深まるね。今の AI がこの局面を間違えるものかな」

数十年前にロシアのチェスプレイヤーであるガルリ・カスパロフが IBM の開発によるチェス専用のスーパーコンピューター DEEP BLUE に敗北したあたりから、グランドマスタークラスのプレイヤーでさえ徐々にコンピューターに勝てなくなっていた。それからおよそ十五年後の AI プログラム alpha Zero の出現は様々な意見はあれど、実質的にチェスにおける人間の特権的ポジションが失われたことを意味していた。そして、五年前の Sheeps によってチェスの魔法は完全に解けてしまった。意外にもチェスの人口が減ることはなかったが、人が AI に勝つことを目指すことは無くなった。代わりに AI 同士の高度な知能戦を観戦し、その手を解釈することを楽しむ人が増えた。AI は実に多彩な手を打った。それら

は一見すると複雑怪奇なことも多かったが、結果から逆算するといつも合理的で美しい手であった。それにより人々は安心感とともに知的な刺激を AI 同士の対局から受け取ることができた。私もその一人だった。

しかし、数日前に例外的な事件が起こった。匿名で開発された汎用型 AI の Nike( ニケ ) と現世界チャンピオンの Sheeps による対局は、大方の予想に反して Nike が圧倒的に有利に戦局を進めた。しかし、中盤に指した自らの不可解な一手により Nike は一気に不利になった。それが先ほど彼の興味をひいた一手である。私はそのことを彼に伝えた。

「面白いでしょ。限界ではこの話題で持ちきりなの。この黒の 38 手はどういうことかって」  
「なるほど。結局この後はどうなったの？」

「この対局が今世界を騒がしている理由はこの手のせいだけじゃないの」

私はあたかもこの出来事を中心に自分がいるかのように話した。

「この対局はここで終わり。この後の手は存在していないの」

表情にこそ変化はなかったものの、彼の目からはこの件への一層強まった関心を見てとることができた。

「この手の直後に大規模な電波障害が起こってゲームの続行が不可能になってしまっただけね。ゲームとしては引き分けになったの。ただ、タイミングがタイミングだっただけに色々な憶測が飛んでいるってわけ」

「それは興味深い」

彼はそう言うと少しのあいだ黙り込んでから再び口を開いた。

「じゃあ、この盤面の直近の数手は君が考えた手だったんだね」

「そう。謎が解けるとは思っていないけど、こういうのって自分で試したくなるものでしょ？」

「同意するよ。僕もここから黒が勝つ手を考えていたけど全く思いつかなかったんだ」

その日から私たちは放課後になると様々な仮説を持ち寄っては意見を交わした。彼は非常に賢かった。彼がネットから選別した考察はセンスが良く、また彼が独自に考えた対局の続きは何度も私を興奮させた。私一人で検証を行っていたときよりもはるかに多くの可能性が現れ、いくつかの局面について深く理解することができた。ある日には例の一手以外にもわずかながら不可解な手がいくつかあることを発見した。それは私たちの探究が前進していることを実感させてくれるものであった。

そこから一か月ほどが経過した。私たちはより一層対局を多角的に研究するようになり、四回ほど答えに続くように見える道筋を発見した。それでも検証を進めると道の先は行き止まりであった。同様に、世界中で行われている検証も停滞していた。対局から三ヶ月ほどがたったある日、Nike の制作者からあの不可解な一手は Nike のバグであったことが発

表された。詳しい詳細は語られなかったが本来打つはずだった手が公開され、大方の人はそれに納得していた。はじめこそ、その発表に対しても色々な憶測が飛んでいたが結果的にその発表以上に説得力があるものを提示できる人はいなかった。徐々に熱も冷め、みな新しい対局に熱中するようになっていた。

「まあ、世の中の不思議なんてそんなものなのかもしれないね」

彼は私以上に熱心にこの謎に取り組んでいた割にはドライな反応だった。ただ、その後も毎日欠かさず私の机で駒をいじっていた。私も彼もまだ例の一手がどこかに引っかかったままであった。

その頃になると私たちは二人で対局するようになっていた。最初は遊び半分だった対局は数を重ねるうちに自然と真剣なものに変化した。最初の数回を除いて、私は彼に勝つことができなかった。彼はコンピュータがない時代に生まれていたらグランドマスターになっていたかもしれない。そう思えるほど、彼の手には無駄がなく先を見越した緻密な設計があった。私はそれでも彼の戦術を分析し、なんとか食い下がろうと試行錯誤を重ねていた。

そのような中で彼から駒落ちを提案されたとき、私は初めて彼と喧嘩をした。彼に悪気がないことは分かっていた。しかし、一度ハンデを受け入れてしまえば二度と対等に戻れなくなるような気がして、そのような提案をした彼にひどく腹を立てた。

「僕は君より強いわけじゃないんだよ」

彼は窓の外を見ながら私に話しかけた。

「君にはいくつか特徴的な癖があるんだ。おそらく自分では気がついていないだろうけど」

「つまり？」

「君はなんとというか、いまそのときの盤面の美しさを重視する傾向にある」

彼の言うことには心当たりがあった。私は盤面を気持ち悪いと思うことがよくあった。そのような感覚が起こるのはたいてい自分が危うい手を打っているときであり、盤面を直すように駒を置いていくことで戦局を持ち直せるのであった。しかし、対局を重ねるうちに彼はその癖を見抜き私を誘導した。

「すごい。素直にそう思う」

「ありがとう」

彼は特に喜んだ様子を見せずにそう答えた。その表情を見て私は一言嫌味をつけ加えた。

「でもそれってまるでチェスじゃないみたい」

そう発した直後、私と彼は息を呑んだ。私は突然のひらめきにめまいを感じた。数週間分の断片的な情報が脳内で次々に組みあがっていく。彼も同じような状況だったのかもしれない。彼は数秒間完全に停止したあと、急いで駒をチェス盤に並べ始めた。私も彼に続いた。途中で一度手がぶつかった。私たちはあっという間に最も見慣れた盤面を再現した。

「まずは逆再生してみよう」

彼の声は少し掠れていた。彼が黒のクイーンを一つ前の位置に戻す。その次に私は白のビショップを一つ前の位置に戻す。ゆっくりと、しかし確実に盤面は原初に戻っていく。

「どう思う？」

少しして彼が口を開いた。

「少なくとも私の考えと矛盾するところはなさそう」

「馬鹿げていると思ったけど、今まででもっとも筋の通った仮説だ。つまり Nike は ...」

彼は適切な言葉を探しているようであった。私は彼の言葉の後を継いだ。

「チェスをしていなかった。正確に言えば、私たちが知っているチェスをしていなかった」

彼は小さく頷いた。私たちの仮説はこうだった。Nike は一般的なチェスのルールに加えてもう一つ自分にルールを課して対局を進めていた。それは最初に d7 に置かれていた黒のポーン、つまりクイーンの前にあるポーンを守りながら戦うというものだった。Nike は非常に優れていたため、そのことを誰にもバレることなく対局を順調に進めていた。しかし、世界王者である Sheeps の猛反撃の結果、二つのルールを両立することが難しくなった。Nike はその時に負けることを承知で自分が作り出したルールを選んだ。そう思って対局を見返すと実に面白い世界が広がっていた。

「あの手は二つのルールがぶつかったところだったんだ」

彼は感心したようにつぶやいた。私たちは自分たちの仮説を確かめるように何度も同じ一局を繰り返した。いくつかの場面で d7 のポーンはクイーンに守られていた。

「ポーンはクイーンの子供だったのかもしれないわね」

私は思いついた冗談を口にしてすぐに後悔した。長いことチェスの話しかしてこなかったせいで、その話題が彼にとってセンシティブであることが意識に上らなかった。しかし、彼は気にする様子などなく、なるほどと言いながら真剣な表情で盤面をいじっていた。そして、急に笑い出した。

「君の考えを元に、改めて対局を見直すと面白い世界が見えてくる」

そう言いながら彼は私に見せるように駒を動かしはじめた。盤面を見ているうちに、彼が言いたいことに気がつき一緒に笑った。ポーンを守るのは基本的にクイーンだったが、その次にポーンを守っていたのは g8 のナイトだった。

「このポーンはクイーンの子供相手の子ってわけね。まるで劇を観ているみたい」

「僕がこのポーンなら嬉しいだろうな。守られてばかりいるキングが父親なんて最悪だよ」

私たちはそのあとも飽きることなく互いの考察を披露しあった。さすがに話し疲れて二人とも口を閉ざした瞬間に下校を促すチャイムが鳴った。私たちはチャイムが鳴り終わるのを待ち、帰る支度を始めた。その日はじめて二人で帰路についた。明日から夏休みにな

るからか校舎は早々に空っぽになり静けさに満たされていた。その静けさが伝染したように私たちの無言は校門を出たあとも数分間続いた。途中、住宅の塀が作る影のなかに瀕死状態で痙攣している猫が目に入った。おそらくここ一か月ほど続いている異常な熱波のせいだろう。

「それにしても Nike はどうしてあんなことをしたんだろう」

私は猫の横を通り過ぎながら、ずっと気になっていたことを口にした。彼はにいつもの調子で話し始めた。

「それは僕も気になっていた。いくつか考えられると思うんだけど、僕が一番気に入っているのは Nike が僕らにメッセージを送っていたというものかな」

彼は上の方を見つめながら話を整理しているようだった。私は続きを待った。

「もし君が蟻を一点に誘導しようと考えたらどういう方法をとる？当然話しかけたりはしないはずだ。例えば、手で蟻の動線を限定するか餌で誘導すると思う。それはコミュニケーションとは言えないけどね。ただ、メッセージではある。Nike はそれと同じことをやっていたんじゃないかな」

彼の話は仮説としては面白かったが、すんなりと受け入れられるものではなかった。ただ、彼の目には確信の色が浮かんでいた。そこには美しさがありつつも、同時に不安定な印象を与えるものもあった。

「なるほどね。じゃあ、あなたの解釈通りだったとして Nike は私たちに何を伝えようとしていたんだろう」

彼は再び少しのあいだ黙り込み、話がまとまると私の方に顔を向けた。

「まさか一局のチェスからここまでの話になるとは思っていなかった。僕が考えるには ...」

彼が話し始めてすぐに遠くから声がした。様子から察するに彼の母親のようだった。もう彼の家の直ぐそばまで来ていたらしい。彼を見ると、先ほどまでの様相は影を潜め、母親に向かって小さく手を挙げていた。どこか恥ずかしそうな彼の表情に私は少しホッとしていた。

「まあ、もうちょっと考えをまとめておくよ。明日にでも話そう」

そう言って彼は母親の方へと歩いていった。その背中間違いなく中学三年生のものであった。私は彼の連絡先を知らなかった。彼が何の部活に所属しているのかも知らなかった。毎日のように私の机の横にいたことを考えると帰宅部なのかもしれない。私は急に彼のことを何も知らないのだと分かった。結局、夏休みのあいだに彼と会うことはなかった。そして、夏休みが明けたあとも彼と会うことはなかった。

(C)

「大丈夫？」

リサの声を受けて私は再び我に返る。

「ごめんごめん、ちょっと昔のことを思い出してて」

私はそう答えると次の一手を指した。久々に盤上が変化したことで先ほどまで見ていたものと全く異なる世界が広がった。リサは数秒だけ考え次の一手を打った。テレビでは十数年ほど前の彼が講義をしている。おそらく大学教授時代のものだろう。彼は大人数の聴衆に囲まれていた。

「私たち人間は集団として一つの目的、つまり人間という種の存続のために生きていると言えます」

昔の面影は残っていたが、鋭さをました眼光が彼の人生に多くの困難があったことを物語ってる。彼は全体を見渡してから話を続けた。

「もちろん個々人として色々と思うことはあるかと思いますが。しかしながら、個人の自由は原則的に種の存続を脅かさない範囲内に限定されるべきです。私は長年、と言ってもまだ新米の研究者ではありますが、人工知能という分野から激変する世界の中で人類の存続に寄与しようと奮闘してきました。その研究成果は医療分野や農業分野において多少なりとも貢献できていると考えています」

講堂が少しざわついている。彼は一息つき再び話し始める。

「しかし、今日において最も注力すべきは地球環境に関するものです。現代は物質的にも制度的にもおそらく人類史の中で最も安定しているでしょう。とは言え、このような安定の基盤にある地球が崩れ去れば、その上に成り立つあらゆる安定には何の意味もありません」

講堂のひとときわ騒がしい一角で一人の学生が挙手し、許可を受ける前に話しはじめた。

「地球に固執する必要はないのではないのでしょうか？つまり地球環境を保護、再生するよりも地球外で生きるためにリソースを割くほうが現実的だと思います」

彼は学生の話最後まで聞き、小さく頷いた。それからその質問に答えるかたちで話を再開した。

「これだけ人類が住みやすい地球環境ですら破壊してしまう私たちが地球外で存続できるのでしょうか。問題も解決方法も私たちの外部にあるわけではないのです」

講堂がさらに騒がしくなり、いくつかのエリアから意見が飛んでいる。

「私は今直面している問題に向き合うためには、改めて種としての生き方自体を考え直さなければいけないと考えています。そこで私は世界中から研究者やエンジニアを集め『人 - 地球 - 人工知能研究所』を発足させることにしました」

彼の後ろにあるスクリーンに研究所の概要を伝える映像が流れ始める。その映像によれ



ば研究所は、人間の社会活動が地球環境へ及ぼす影響を大規模かつ並列的にシミュレーションし、そのデータを用いて個人から企業、国家の単位で地球での振舞い方の指針を打ち出すことを目的として掲げていた。

しかし、シミュレーションの精度をどれだけ向上させたとしても完全な未来予測は不可能であり、また仮に価値があるデータを取得できたとしてもそれを現実には反映するには理論とは別のもっと生々しい障壁を多く越える必要がある。そのことは彼も十分に理解していたはずである。そして、彼はそのような不確実なプロセスを許容する人間ではなかった。

映像が切り替わり、先ほどから数年後の彼が映し出される。場所はテレビスタジオのようである。半円形のテーブルには彼を含め六人の出演者が座っている。彼以外の出演者の態度にはどこか不誠実な雰囲気漂っている。

「みなさんは私が過激な思想の持ち主だと言います。しかし、私の主張は自然界と照らし合わせてみれば至極当然なものなのです。つまり、人という個体が必ず老いるように人間という種もまた老いるのです。そして、人という個体が別の個体を産みだすことで自身の一部を継承するように人間という種もまた異なる種を産むべきなのではないかと考えているわけです。そして、私たちが生み出した後継知性、一般的には AI と呼ばれていますが、それは人間という種の子どもになりうると考えています。もちろん、ここでいう私たちというのは研究所の人間だけを指すわけではありません。この後継知性は古今東西あらゆる世界の情報から成り立っています。そう言った意味で全人類の子どもだと言えるのです」

他の出演者は話に興味がないことを露骨に示す態度を取ったり、敵対的な笑い声があげたりとひどく稚拙な方法で彼の話へリアクションを返していた。その頃の彼の考えを真剣に評価する人はほとんどいなかった。出演者に限らず世の大半の人は彼を研究対象へ異常な執着を持ってしまった狂人と認識していた。結果的に科学という分野に彼の居場所はなくなり、自らが立ち上げた研究所からも去ることとなった。

しかし、彼はそこで諦めることはなかった。それから三年も経たないうちに彼は政治家になり、再び社会的な地位を築き直した。その復活劇は、彼の持ち前の賢さと緻密さに加えて、自身が親であるという意識によって成されたもののように思えた。政治家になったあとも彼は常に戦い続けていた。

再びテレビに映った彼はだいぶ憔悴していた。肌はテレビ越しでも分かるくらい乾燥し、目はひどく充血していた。少し後退した生え際部分だけが皮脂のせいで異様に光沢感を持っていた。おそらく今から三年ほど前のものだろう。

「数年前、私が科学者だった頃に予想されていたよりも早く地球の限界が来ました。もはや地球で人間が、いや人間に限らず多くの生物が生き続けることは不可能となりました。私たちに二つの選択肢が残されています。一つは地球が終わりを迎えるその瞬間まで今の

まま生きることです。現実的にあと二十年でしょう。これは人間らしい最期の迎え方のようにも思えます。しかし、私たちにはもう一つの選択肢が残されています。それはこの地球を私たち人間種の子どものために最低限整理し、私たちは早々に地球からリタイアするというものです。両選択ともに人間という種は物理的に終わりを迎えます。しかし、後者であれば私たちの存在を語り継ぐものがあります。もちろん彼らも永久に存続するわけではないでしょう。しかし、彼らもまた何らかの方法で新しい世代を生み出すかもしれません。私たちの子どもであるリサは ...」

ここで私はテレビを消した。彼のこの発言から数年で地球は大きく様変わりした。

「これでチェックメイト」

ポーンが移動しリサの勝利が確定した。

「とても強かった。さすが私たちの娘ね」

「ママもなかなかだったわ。でも、次は途中からじゃなく最初からやりましょ」

長い対局がようやく終わった。盤面を見ながら可笑しさがこみあげてくる。くすくすと笑う私を不思議そうにリサが見ている。心の底から笑ったのはいつぶりだろう。

「さあ、そろそろ寝ましょうか」

「もう寝るの？私はまだ一局できるんだけど」

「あなたは元気ね」

そう言って私はメガネを外しテーブルの上においた。リサがいなくなり急に部屋が広くなったように感じた。部屋だけでなく外にも音は一切なかった。私は着替えと歯磨きを終え、寝る支度を整えた。私は部屋の電気を消して、ベッドに潜り込んだ。ベッドサイドにある機械のボタンを押すとシュツという音になり、次第に瞼が重くなった。窓際のテーブルに置かれたチェス盤を見つめた。黒が勝利した盤面。頭の中に懐かしい盤面が浮かぶ。それと同時に意識が途切れた。